

Catherine Conybeare,
The Irrational Augustine, Oxford Early Christian Studies,
 Oxford University Press, 2006, pp. xvi+225.

上 村 直 樹

本書は、1997年にトロント大学からPhDを取得し、現在は米国ペンシルヴェニア Bryn Mawr CollegeのAssociate Professorであるキャサリン・コニーベアの2冊目の著作である。コニーベアはこれまでに、学位論文にもとづいてOxford Early Christian Studiesから刊行されたノラのパウリヌスに関する研究書 *Paulinus Noster: Self and Symbols in the Letters of Paulinus of Nola* (Oxford 2000) を出発点に、“Terrarum Orbi Documentum. Augustine, Camillus, and Learning from History”, *Augustinian Studies* 30: 2 (1999), “The Ambiguous Laughter of Saint Laurence”, *Journal of Early Christian Studies* 10: 2 (2002) などの論文を公刊し、古代末期の西欧世界における文芸の実態を探求するというテーマに取りくんでいる。4世紀後半から5世紀前半にいたる後期ローマ帝国のなかに張りめぐらされたネットワークの一翼を担ったパウリヌスの活潑な書簡のやりとりを分析することによって、キリスト教共同体のなかでの自己と身体についての認識や、キリストへの愛と成員相互の想像力や友愛によって形成された共同体について考察したコニーベアはついで、パウリヌスの重要な文通相手であるアウグスティヌスに関心を寄せている。そして、“The Duty of a Teacher: Liminality and *disciplina* in Augustine’s *De ordine*”, in K. Pollmann and M. Vessey (eds), *Augustine and the Disciplines: From Cassiciacum to Confessions* (Oxford 2005) では、カッシキアクム対話篇の一つ『秩序について』における対話の技法を分析するとともに、その成果をさらに展開する本書では、アウグスティヌスの初期対話篇を包括的に取りあげている。すでに明らかにされた『秩序について』の分析を踏まえて、カッシキアクム対話篇とは、パウリヌスに比していっそう錯綜するア

ウグスティヌスの自己形成の物語を、さまざまな技法を用いていわば見世物 (spectaculum) のように対話に参加する人々が演じた作品であるという考えを呈示するのである。

本書は、全3部から構成されるとともに、次のように章別に分かたれている。第1部「なぜ対話篇なのか」は、第1章「戸口において」と第2章「あるキリスト教の劇場」から、第2部「哲学する女性たち」は、第3章「昼餐としての神学」と第4章「本当の自由学芸」から、第3部「非理性的なアウグスティヌス」は、第5章「理性の尋問」からなっている。エピローグは「可能性を発揮する」と題され、さらに研究の方法についての小論が附されている。

まず第1部においてコニーベアは、すでに周知の問題領域においてしばしば看過される疑問をあらためて提出する。というのも、20世紀のアウグスティヌス研究のなかで、カッシアクム対話篇をアウグスティヌスのそれにつづく時期の著作群との持続性、ないし断続性という観点から、いかに捉えるかというテーマがくりかえし立てられてきた。カッシアクム対話篇にキリスト教的な指標を認めうるのか、それともプラトン主義者の所産なのか、という二分法的な捉え方を切り口にして、そうした分節がそもそも妥当であるか、また対話篇のテキストが実際の対話の忠実な復元であるか、さらに、先行する文学ジャンル、たとえばキケロの対話篇との連続性がいかに認められるか、あるいは、390年代のアウグスティヌスによる集中的なパウロ繙読からつづいて『諸問題についてシンプリキアヌスへ』に結実する人間の自由と神の恩恵についての理解との非連続性をいかに捉えるか、といった問題群に焦点があてられてきた。これに対してコニーベアは、そもそもなぜ対話というスタイルが採られたかを問う。これは、カッシアクム対話篇をそれ自体入念に仕上げられた文学作品として扱うことを意味する。そこで、対話篇に参加した人々の歴史的な人物像が精査されるとともに、キケロやプラトン以来のこの文学ジャンルの歴史的な文脈が顧みられる。さらに、対話のただなかでの騒がしい中断や、笑う者たち、沈黙する者たちの介在、また対話に途中から入ったり、出てゆく人々の存在、こうした対話に付随するような出来事が手がかりにすることで、対話に内包されていた裂け目があらわにされる。というのも、論じられる事柄 (res) と言語 (verba) や辨証法とのあいだには、さらに対話に直接参加した人々と時間的には後続する読者とのあいだには、「境界的な空間 (liminal space)」 (p. 30) が見出されるからである。したがって、この対話篇はある結論を説

得的な仕方では提出するというよりは、アポリアを証示するジャンルとして機能し、読者への参加をうながす見世物として捉えられることになる。

第2部でのコニーベアは、アウグスティヌスの母モニカの対話のなかでの役割を吟味する。そして、カッシキアムでの哲学探究が発展途上にあることをあらわすシンボルとしてのモニカに着目する。すでに示されたような言語や辨証法の限定的な機能を超える存在として、モニカが位置づけられるのである。というのも、対話に参加したりケンティウスやトリュゲティウスらがときに角突き合わせ、各々の勝利を求めて競うかのようにふるまう一方で、モニカは言葉を濫用することがあっても、そうした争いからは超然として、疑義を呈示し、修正を提案し、会話をみちびくものとして描かれる。モニカは、人々を深い洞察へといざなうものとしてプラトン『饗宴』でのディオティマに比定されるのである。つまり、アウグスティヌスの母としてのみならず、いわば真の知恵をになう教会の母 (mater ecclesia) としても捉えられる。カッシキアム対話篇における真理探究のプロセスは何よりも、辨証法という手続きにしたがって教育と学習を反復していると規定されてきた。だが一方では、モニカによって象徴されるような、信仰の賜物によって霊的な真理をつかむ別の道筋が明らかにされる。したがって、カッシキアムでの議論にしばしば見出されるような、議論の転回点における突然の中断や飛躍、あるいは破綻といったそれ自体では理解が困難ないくつかの箇所について、コニーベアが主張するように、一方の道筋が他方よりもいっそうすぐれているという帰結をみちびくことを避けるためにもうけられた仕掛けであるという説明が成立することになる。

さらに第3部においてコニーベアは、著作タイトルである “irrational Augustine” それ自身を、『ソリロキア』における「理性 (ratio)」との対話を通して考察する。その理性は、対話のなかで目指される目的としてではなく、真理探究のなかでの対話相手として呈示されている。そこで理性が、読者に対して言語と学習の限界を設定するとともに、自ら自身の限界をも明らかにすると見なされる。さらに、これまでのカッシキアムでの対話から示されたように、神的なものへの関与の可能性は、「知者 (sapiens)」に限られるのではなく、さらに「幼児 (infantes)」や「無知者 (ignorantes)」にも開かれている。そこで、人間性 (humanity) は、合理性 (rationality) それ自体によってではなく、すべての魂に本来的にそなわっている理性という能力において見贖もられることになる。したがって、現実の生のうちに起こりうるよう

な不条理で、きわめて厄介な人間性の分裂という事態が、理性に依拠することが認められるのである。さらにコニーベアは、カッシキアム対話篇と同じ時期の何通かの書簡を分析して、いかにアウグスティヌスが、「いっそう不明瞭に (incertior) なること、自己の知識の伝統的な基盤を不安定にすること、その卓越した身分から理性を引き離すこと」(p.172)によって、後期の書簡において顕著となる “dogmatic Augustine” と対峙するような “irrational” な自己であったのかを考察する。これは、アウグスティヌスのこの段階の探求の不確定な枠組みを明らかにすることによって、何がその理性の地位に取ってかわったのかを理解することがはじめて可能になるという仕方、この時期のアウグスティヌスの哲学探求の全体性を捉えようとする試みである。

エピローグにおいてコニーベアは、これまでの考察の意義を再考する。アウグスティヌスにとって “irrational” であるとは、理性から理性の限界設定を学ぶという仕方、知恵へあずかる道を探索することである。この不確定さに揺れる時期を経ることによって、アウグスティヌスは自らの根本的な関心事へと接近する新たな方法を見出してゆく。それによって、言語とその伝達機能について、さらに言語と知恵との、また言語と神との関係性についての洞察を展開する準備がととのえられたのである。そしてその嚆矢は、アウグスティヌスの初期の聖書註解における意味論的な理解のうちに見出されるであろう。

カッシキアム対話篇をめぐるコニーベアの解釈は、アウグスティヌスのテキストを緊密な仕方を読み解き、全体を通して刺激的、かつ説得的な仕方 “irrational” なアウグスティヌスとは何であるかを考察している。文献学的に綿密な手続きを踏まえつつ、この時期のアウグスティヌスの思想のしくみが、その修辭的、かつ哲学的な所以から示されるのである。本書は、アウグスティヌスをアウグスティヌス自身の観点から再構成することによって、従来の解釈とは異なる興味深いアウグスティヌス像を呈示していると評価される。さらに、コニーベアの解釈は本書の読者に対して、新たな問いを設定することを可能にするとも思われる。それは、カッシキアム対話篇につづく時期において、なぜ、アウグスティヌスがこうしたメリットにもかかわらず、このジャンルから離れてゆくかという問いである。なぜ、対話篇ではないのか。さらにその先には、いかに『告白録』という新たなジャンルが生成するか、という問いが控えているだろう。探究の不確定性をあらわにする “irrational Augustine” はいかに

変容するのだろうか。

Gerald Bonner,
Freedom and Necessity:
St. Augustine's Teaching on Divine Power and Human Freedom,
The Catholic University of America Press, 2007, pp. xii+142.

菊 地 伸 二

これまで長年にわたりアウグスティヌス研究を続け、なかでもペラギウス主義に関する重要な論文、著作を発表してきた著者によって書かれた本書は、2001年に彼がマルタ大学で行った講義が基になっている。全体は、序文、序論と七つの章から構成されているが、『自由と必然性——神の力と人間の自由についての聖アウグスティヌスの教え』と訳されるこの作品の意図については、著者は「序論」で次のように述べている。すなわち、「私の意図は、アウグスティヌスが、一連のペラギウス論争において強調し擁護した予定の神学について精査すること、また、恩恵の影響下にあるにもかかわらず、墮落した人間は自由選択を行使する機会を有しており、責任ある行為者であるという絶えざる主張が如何に確固たるものであるかを考察することにある」と。また、彼は本書において、異端でも分派でもないペラギウス派に対して、なぜアウグスティヌスがあれほどまでに激しく攻撃をしたか、また、教会に属するすべての人々には、人類の墮罪ということの故に洗礼をあれほどまでに強要したかということの問題として提起している。

著者によれば、アウグスティヌスの予定の神学の本質は、神の全能性の確信に他ならないという。神の全能性は、何よりも、神が万物を無から創造したということのうちに示されており、その無からの創造の教えは、マニ教に代表される二元論的な異端を排除する際に大きな役割を演じた。さらにこの教えは、神と人類との関係にだけでなく、神の摂理の教説にも及ぶことになり、神の意図に反するものに変化をもたらすような人間の意志に対する抑制という考えにつながっていき、最終的には、不従順な子どもへの神の罰を強調するに至るのである。